



## 茅葺き\_1

2010年10月～2011年2月

夏前に屋根はワラで葺くことが決まったが、それには次の三つが必要だった。

- (1) 屋根の小屋組をつくること
- (2) ワラを大量に集めること
- (3) 屋根葺きの技術を学ぶこと

小屋組は竹を組んで作り、ワラは刈入れが終わった大原野の大五さんの田んぼからいただいた。

屋根葺きの技術を持ち合わせないわれわれを指導して下さったのは、大五さんから紹介いただいた萱金(かやきん)の齋藤進親方だった。



竹で小屋組をつくっていく。



刈入れ後の大五さんの田んぼで。ワラの運搬には寛大にもトラックを貸していただいた。大五さんには世話になりっぱなしだ。

かやきん

## 萱金の齋藤親方

萱金4代目の齋藤親方は、芸大から近い大原野上里にお住まいで、伊勢神宮の屋根など文化財も手がける茅葺きの名匠。

園部の京都建築大学校に、親方がかつて京都文化博物館のためにつくった茅葺き屋根の見本が保管されているので、見学に行き、その実力のため息が出た。京都の職人らしく、多彩な化粧仕上げの技もお持ちだ。お会いした当時は、体調をくずされ、仕事を辞める直前だったにもかかわらず、とても熱心に指導下さった。

「後継ぎがおらず、萱金もワシの代で終わる」と残念そうに語られた。



10月20日、つちのいえに来られ、ワラの束ね方を見せて下さる齋藤親方。根っからの職人で、いつも口より先に手が動く。われわれはそれを見て学ぶ。



園部の京都建築大学校で、斎藤親方の端正な茅葺き見本を見学する。



萱金の倉庫は洛西ニュータウンの中にあるが、ニュータウン造成よりはるか以前から同地であり、竹林に囲まれた周囲は大原野の原風景と彷彿とさせた。  
中には、茅を葺くときに使い分けする数種類の茅がたくさん保管されていた。



親方手づくりのガンギ。茅の端を叩きそろえて押し込む道具で、地域によって呼名が異なる。



鉄製のハリと屋根バサミ。伊勢にいい道具屋があるそうだ。



竹のハリで茅束を縫いとめる仕方を教えて下さる。



2010/11/11

ワラは端を揃えて束にする。親方のデモンストレーションを見たあと、つちのいえてワラ束をつくる。だが、屋根を葺くには相当な量が必要で、すぐに足りなくなりました。



2010/11/25

軒先にワラ束を括りつける「軒づけ」。親方の示すやり方を見てやってみる。だが男結びはむずかしい。

近代的な教育では、技術を教えるとき、言葉を使うが、言葉なしで身振りだけで伝えることがもっとあっていいと思った。



2010/12/2

## 編み下がり

垂木にあたる竹に横木（長木ないし小舞竹とも呼ぶ）にあたる竹を縄で縛りつけていく。上から下に縄を括り付けていくので、「編み下がり」という。

ただし、通常の茅葺き屋根は上に棟木がある台形だが、つちのいへの屋根は円錐形。各面はバラバラの三角形。しかも軒の高さがそろっていない。

親方は、円錐形の屋根の東屋を葺いたことはあるそうだが、こんな不ぞろいな屋根の下地はない、と呆れ顔。だがやってみようと言って下さる。職人の血が騒ぐのだ。



周囲に足場を組む。  
丸太と足場板は斎藤親方が持ってきて下さった。  
屋根は下から上に葺いていくので、最初の足場は軒の高さにそろえる。足場は同時に茅置き場にもなる。



足場ができると、親方の作業ピッチが上がった。大原野から茅葺き職人の土橋道一さんを選んでもらって、どんどん作業を進める。ワラ束を並べて割り竹で抑え、足場竹を取り付けて2層目、3層目と進んでいく。われわれはプロの手際よい仕事を必死で眼で追いかけるしかない。



2011年1月20日、ワラを使い果たしたので、斎藤親方の指示で、芸大の丘の斜面に生えているスキを刈り集める。イネワラよりも油分を多く含み、耐水性がよく、屋根葺きに向いているという。つちのいえの丘それ自体がすでに屋根材の資源の宝庫だったのだ。その気づきは衝撃的で、以来、スキの草原を見る眼が変わってしまった。



茅は根元から鎌で刈る。機械で刈ると株の部分が荒れて水はげが悪くなるからだ。

1月には稲ワラを使い果たしたので、齋藤親方から提供いただいた茅を使っていく。茅葺きの仕事を辞めるのでもう使わないから、と。親方は当時、手先のしびれに加え、白内障で片目が見えにくい状態で、入院する前に作業の目処をたてようと毎日来て下さる。齋藤親方の最後の茅葺きになると思うと、身が引き締まる。

だが学生参加者は、1月末になると作品展のため激減する。そもそも木曜午後だけという授業スケジュールや、学期という学校のな仕組みが、茅葺き作業とは合わないのだ。つちのいへは、本質的に「授業」ではないといえる。

茅葺きに使う茅は種類ではなく、長さや質の違いを活かし、装飾や機能によって使い分ける。例えば屋根下地に敷くステガヤには長い茅を、挿し込みには短く刈った切り茅を使う。



2011/2/2



右がステガヤ。長い。



サシヤネやフキガヤ用の切り茅。短め。

**左上:**

茅が厚くなってくると、竹針を挿して引き上げ、シュ口縄を野地竹にまきつける。屋根の上と下で声をかけながら行う。屋根下地に茅束を縫い付けていく青空の下のファイバーワークだ。



**右上:**

曲がった鉄製のハリをまわして茅束をとめていく。



2011/2/1

**右下:**

ガンギで茅を押し叩いて屋根斜面をきれいに整えていく。この段階では茅束の編み付けはゆるめで、あとで縄を締める。斜面に凹凸が残ると、雨水の流れが悪くなり、傷みが早まる。



2011/2/2



2011/2/5



軒の刈り込みをする斎藤親方。翌日入院するにもかかわらず、屋根仕事のネリをつけるために来て下さった。



親方が滋賀の野洲から助っ人に呼んだ茅葺き職人の吉田顕さん(畑中屋根工事)。はみ出ている縫い竹を切り、茅を持ち上げて新しい茅を差し込むサシガヤ。



タタキでケラバ(茅葺きの端の部分)の面を整える。

北側は土壁があるので、屋根をつけたが、まだ土壁がない南側は、茅が足りないので屋根は未完のまま。だが、ケラバや軒はきれいに刈り込まれ、鮮やかな断面を見せる。雨よけをはずした版築壁の矩形のヴォリュームが、不整形の空間に映える。未完成のまま完成したかたち。この劇的変化に立ち会った学生は、休学中の木下愛理だけだった。やはりつちのいえは「授業」ではない。



トンガリ屋根の仕上げ。穂先のついた長いヨシと、短めの茅を交互につけ回す。根元は茅束を編み回して太くする。編みつけは太さ1mm弱の銅線(一部、針金)。シュロ縄はあくまで飾り。



南側から 2011/2/9

つちのいえ初のお披露目展  
2011年2月9日～13日

半分完成した茅葺き屋根を芸大作品展  
に合わせて初めて一般公開する。



木下愛理手づくりDM



2011年2月11日(金)、雪が降った。  
つちのいえの屋根に雪が積もったのは、  
これが初めてだった。



## 茅集め

屋根を葺く茅が足りないため、斎藤親方から提供を受けたほか、近隣で刈り集めることを繰り返した。ススキ生い茂る野原が材料の山に見えるようになった。

- 1回目：2011年1月20日 ～つちのいえの丘
- 2回目：2011年3月18日 ～西山高原
- 3回目：2012年3月22日 ～西山高原
- 4回目：2017年5月4日 ～丹波・秋山工房庭



茎の断面が赤いススキ



西山高原にて(2012年3月22日)

丹波の秋山陽先生の工房の敷地にヨシが群生する原っぱがあり、そこでも刈り集める。コンゴ人留学生のMbugha Meni(染織専攻)も参加した(2017年5月4日)。

ヨシも同じイネ科だが、湿地を好み、地下茎で殖え、背も高くなる。ススキより固く、中は中空。



2017/5/4



2011/3/18



2011/3/21

**2011年3月11日(金)  
東北地方太平洋沖でM9.0  
の大地震発生。**

つちのいえの目標を、あらためて「自然とともに人があるための空間をつくること」に定める。

刈り集めた茅を取納しておく小屋を急ぎよ廃材でつくる。

屋根はブルーシートを折り返して二重にしたが、大きなシラカシの木の下なので、10年たった今(2021年春)もそのままである。



2017/5/4